

親の心をとくよしもかな

と、至孝を歌ひし此肉も、

高山彦九郎が、三條橋上に於て、草莽臣高山彦九郎と呼び、泣きつゝ伏して皇城を拜し、毎朝盥明水を浴び、屋上に坐して一日も廢せず、談一たび皇室の式微に及べば、慷慨悲憤、聲淚共に下り、

われをわれとしろしめすかやすめらきの

玉の御ころのかゝるうれしさ

と、愛國の神心を漏す肉も、

梅田雲濱が、吉田松陰と會見し、水戸に到り、武田耕雲齋、金子等と謀議して、京都に歸り、

妻臥病床兒叫飢 挺身直欲當戎夷

今朝死別與生別 唯有皇天后土知

と、斷腸を吟じたる肉も、

吉田松陰が、年三十にして、斷頭場裡の露と化し、

山河襟帶自然城 東來無日不憶神京

今朝盥嗽拜鳳闕 鳳闕寂漠今非古

空有山河無變更 野人悲泣不能行

聞說今皇聖明德 敬天憐民發至誠

鷄鳴乃起親齋戒 祈掃妖夷致太平

從來英皇不世出 悠悠失機今公卿

人生如萍無定在 何日重拜天日明

と、皇恩感慨の迸る肉も、是れ毫も消滅するところなくして、現在五千萬人の同胞の肉に相續して居る。菅公の恩賜の御衣の披瀝したる肉と、維新志士の肉と、是れ二にあらずして一である。或時は菅公と現じ、或時は楠公と現じ、或時は鎌足卿と現じ、維新志士と現するは、其現するところの、人と時代は異れども、此肉は決して異なるものではない。其本源は日本人は日本人として一貫したる肉である。日本に生るゝは、此肉が生

此肉が或時は菅公と現じ維新志士と現じ吾等と現す

るゝのである。

日露戦役に、大將とか中將とか言へる軍人は勿論のこと、昨日入營したる一兵卒も、未だ曾て教育を受けたことなき、山間僻地の老翁までも、國の爲めに盡すと云ふ、誠心誠意の日本魂の發動したるは、是れ發動すべき原因が、此肉に具るからである。打死にするも、陛下の爲めに此肉を捧げたるが故に、却て欣々然として、戦場の露と消ゆるは、是れ此肉が曾て、陛下の爲めに盡したるが故に、再び盡すも、歡喜の生ずるは、其因のあるところに、其果を生ずるからである。此肉の因が國家に盡したるが故に、果も盡すのである。日露の戦役に日本魂が一兵卒にも、充滿したるは、吾日本人の三千年の肉が一貫したりと云ふことを證明して餘りありと、斷言することが出来る。

東郷大將の肉、是れ楠氏の肉にあらざるか、一兵卒の肉、吉田松陰先生の分肉にはあらざるか。否、個人の肉が、個人に相續せらるゝものにあらず。肉に個人なるものなく、日本人に個人なるものなし、個人の肉と思ひ、個人の日本人と思へるは、肉其ものを知らずして、肉の縁起したる自我を見るからである。楠氏の肉は、湊川に打死するこ

東郷大將の肉、
是れ楠氏の肉に
あらざるか

現代の肉が又未
來人の肉となる

同時に、楠氏個人を離れて、日本人の肉である。三千年の肉である。楠公の肉が、楠公の偉大なる丈、肉に偉大を生じて、百千萬人に感應する。維新志士の肉は楠公の肉が個個に分離されたかも知れない、維新志士の肉と、楠公の肉と、其時は異なれども同一である。日露の役の日本魂は、維新志士の日本魂にして、維新志士の肉が、日露の役の肉である。此現代の肉が、又未來日本人の肉となるから、現代の吾等の肉は、實に大切な肉である。若し吾等の肉が、三千年を一貫する肉に背きて、歴史を汚すが如き行爲あらんか、此肉の行爲は、又未來の肉を生ずるの因となるが故に、吾人同胞の肉は、飽まで三千年の肉を一貫せねばならぬ。

肉は三千年を一貫したるものなれども、此肉は因果の廻轉によりて、或時は不忠の臣を生じ、或時は有害なる肉を生ずるは、肉の罪にあらずして、肉を個人のものど執する自我の罪である。何分肉は三千年を一貫するも、此肉は個人に發動して、相續せらるゝ肉なるが故に、三千年の肉が個人の肉の如くなりて、不忠の臣も生ずれば、歴史に背く行爲を生ずる、故に大切なる問題は、此三千年の肉即ち歴史を發動する個人の行爲である、

肉より生ずる自我の行爲である。

殊に現今の如く、世界と交通し、人種雜然として、共同生活を爲す、外交の時に於て、日本人が日本人として、三千年一貫せる肉を相續すると云ふ事は最も大切なることである。若しも三千年の肉を忘れて、肉は個人實在のものとして、自我の行爲あらんか、全く歴史に背きて、萬國何れの肉とも知れざる、肉を未來に傳ふるに至るのである。日本人の肉が日本人を離れて世界の肉とならば、社會は秩序たる美觀を失ふて、國家制度なるものを根本より破壊するのである。米國人は米國人の肉を相續して愛國の本源を爲し、支那人は歴史上の肉に廻轉して、愛國の觀念を養ひ、英國人は英國の歴史に生きて、始めて英國人である。各國人が各國の肉を相續して、其國に生れたる愛國の上に、各國と交情して、始めて世界の秩然たる美觀たるを得るのである、日本人が他國の思想に感染せられて、歴史の肉を滅却するが如きことあらば、吾人同胞の憂や、是れより憂ふべきはないのである。世界交情の上に、巍然として日本人たる、三千年の一貫せる肉を、後人に相續せしめて始めて、日本人に生れたりと言ひ得るのである。此肉が日本魂の本

各國人は其國土の肉を相續して愛國の本源と爲す事

國家も此肉を離れて存在する理由がない

幸徳等の危險思想は病的である

源である。此肉が二十年で勤王の爲めに斃るゝも、八十年で國家の爲めに斃るゝも、決して長短はない。唯國家の爲めに盡すと云ふ事が、年數に依らぬ、建國以來一貫したる日本人の肉の本面目である。此日本人の肉は日本國家を離れて生ずべき理由もなければ、國家も此肉を離れて存在すべき理由がない、此肉と此國家とは一對無二である。國土と吾等とは、人間と國土なるが故に異なるが如くなれども、人間の生すべき理も、國土の生すべき理も、更に異なることなき、因果の往來なるが故に、國土、吾等、二にして一、一にして二である。國土を離れて吾等は存在することは出来ぬ、此肉は直ちに國土の肉にして、個人の肉ではない。此肉を勤王の本源と自覺し、此肉を國家と自覺し、此肉を三千年不生不滅に相續すると徹見するが禪である。日本魂の端的、是れ禪である。此肉を健全にすれば、彼の幸徳等の危險思想の如きは、夢にだも發生すべきものではない。危險思想は病的である、身心二見の不調和より起る病的である。此肉を忘れ、自己を忘れ、公明正大の日本に生れたる、因果の眞理を忘れて、徒らに自己個見の、病的たる腦の、僅に思想するところに捉はれて、危險の説を吐くので、全く病的作用である。

思想上の狂者である。是等狂人の生じたるは、教育に依ると雖も、實は體育を誤りたるより生じたる産物である。肉の不健全より來れる自然の結果である。肉の不健全なるのは、常識を逸するが常である。肉が不平等になると同時に、思想も不平等になる。現代の日本人に、幸徳等の危険思想と其説は異れども、狂態なる思想に捉はるゝ、非常識の病人は非常に澤山にある。是等は肉の不健全より生ずるので、此不健全の肉に、思想狂態を加ふる時、若し教育の一步を誤れば、全く常識に計るべからざる、狂者となりて、危険云ふべからざる者を生ずるは爲政者の、最も注意すべき事である。

斯の如く、危険思想を唱ふる狂者、常識を逸する痴人を濟度するには、教育の力に信頼するも可なれども、先づ根本的の體育に向つて着眼せねばならぬ、此肉が健全にならねば、如何に教育者が喧々するも、爲政者が策を講ずるも、到底効を奏することを得ぬ。是れ其本源を正さざれば、支流を清むることを得ざるは當然なる結論である。

日本魂禪は、此本源の肉に向つて注入し、此肉の健全に向つて、單刀直入に術を施すに存するのである。日本魂禪を日々に行へば、必ず身心が壯健になる、身心が壯健になれ

ば、此肉の三千年を一貫する其理をも、自覺して、危険思想の如き、狂的思想は夢にだも生ぜぬ。全く常識の發達したる人となるのである。此の日本魂禪は國家の清涼劑である。

日本魂禪の行ひ

日本魂禪は毎朝、床を出づるや寢衣のまゝ、(寢衣の儘、行ふときは薄衣にして、帯にて腹を締めざるが故に最も効力多し)、第九圖の如く正坐して。氣を沈め、全身の力を注ぎて、腹中一切の邪氣、鬱氣惡瓦斯等を吐く心持ちを以て、極大きく、ハアと腹中の何物をも吐出するのである。是を爲すこと三度、十分位正坐して、全身心の力を以て、手も足も腦も、全機關の血管の活動を生ずる勢を以て、

呼吸と、全身の氣合と、筋肉の活動と、三者を一度に、下腹のドン底に徹すべく、

ウーン(吽) ウーン(吽) ウーン(吽)

と、腹中に何物をも藏むべき勢を以て、是を爲す。是を爲すに注意すべきは、正坐を亂すべからず。呼吸のみ爲すにあらず。筋肉と氣合と呼吸の三者を一度に爲して、ウーンと下腹に徹して、長く引きて、

身心堅固の此肉は
しんじんけんごの、このにくは
と切つて、又前の如く、

三度と繰返して、又唱へて曰く、
やまとだましひの、けつしやうぞ

日本魂の結晶ぞ

三千年を一貫し
三せんねんをいくわんし

不生不滅に相續す
ふしやうふめつにさうぞくす

豊太閤も 楠公も
ほうたいこうも、なんこうも

興國維新の勳業も
こうこくゐしんの、くんげふも

今現在の 我國の
いまけんざいの、わがくにの

吾等の肉に備はるぞ
われらのにくに、そなはるぞ

身心堅固の此肉は
しんじんけんごの、このにくは

大和魂の 結晶ぞ
やまとだましひの、けつしやうぞ

斯の如く、行ひ終て、又前の如く、

ハ——ア

を三度、繰返して十分正坐して止む。寝衣のまゝ行なふことを厭ふ人は、洗面して、最も空気がき方に向つて、第十二圖の如く、大の字に立つて中庸を下腹に取りて、其下腹

より發動するが如く、全身心の力を込めて、先きの如く行ふのである。又夜床に入らんと欲するとき、斯の如く爲す。毎日二回、又は便宜、食後、一時間半を経て、坐、立何れにても、好むところに行ふのである。

是を、行ふこと親切なれば、如何なる人にも、半月なせば、半月の快樂を覺へ。一月爲せば一月の樂を得て、心身堅固となり、此肉の本面目を自覺して、死生に安心し、國家に安心し、家庭に安心し得ることは、余が實驗上明かに保證するところである。

唯注意すべきは、始めより、身體の慣れざるに、餘りに熱心に行ふときは、從來習慣上の身體が、急に變化を生ずる爲め、頭痛がしたり、腹痛が起つたり、胃に故障が生ずるが如き、現象を呈するが故に、始め一二週間は、坐禪、按摩禪にて、靜かに練習し、緩

より急に、小より大に、細より麤に、一歩づゝ秩序的に練習して、追々に此日本魂禪を行へば、毎日愉快に行ひ得て、此肉のあらん限り、無病長生にして、國家の爲めに、盡瘁することを得るのである。

日本魂禪の效果

此日本魂禪を、毎日、毎晩に行ふ効果は、實に偉大であつて、獨り自己の身體壯健にし

閨門感受

て、愉快なるのみならず、其爲す事業にも効果を生じ、家庭が圓滿に安心することが出来るのである。尙偉大なる効果は、毎日是を行へば、知らず識らずの間に、小兒を感化して、見聞の上に日本魂の何物たるかを解せしめ、國民教育の源泉を爲すの利益があるから、是非毎朝夕、家庭に應用したいものである。尙重大なる効果がある、國家を廓清するの基礎と爲すほどの、大切なる効果である。

是は第四章に述べたるが如く、此肉は何に依つて相續するかと云ふに、閨門感受に依りて相續するのである。日本魂の肉は千古に生ぜず、滅せざるものなれども、發動して生死廻轉がある。此生死の廻轉が父母の閨門に、繰起して力を生ずるのであるから、閨門が相續

の根本である。其閨門に感受するは、父母の其時の身心状態を根本とするから、父母が此日本魂禪を、毎朝夕に行ふて、身心堅固なるときに妊娠せば、父母の身心状態が、日本魂と云へる身心堅固の上に在るから、感受したる其兒も必ず、身心堅固の日本魂を具

有して生るのである。即ち父母の閨門に於ける、身心状態が其儘其兒に感受するのである。閨門に邪念あらんか、其時の胚胎兒は必ず不良兒である。閨門に禮讓あらんか、

人は生死に悲喜するにあらざる縁起に悲喜す

其時妊娠せられた兒は良兒である。是れ因果の命するところ、寸毫も味することを得ぬ。此實例は拙著家庭と開運の、閨門の自覺に詳説してあるから、御参考が願ひたい。故に忠良の兒を得んとするも、孝子を得んとするも、不良兒を生むも、父母閨門の自由である。否な自然の感受である、故に閨門ほど大切なところはない。國家を廓清せんと欲せば、先づ閨門を廓清せねばならぬ。閨門の感受正義なれば建國以來の誠忠の士の肉も行為も、自ら縁起して其閨門に感應するのである。肉は不生不滅なれども縁起するところに、力を生ずる。現在吾人の肉が五十年とか百年に死するは、根本を滅却するのでなく、唯因果の廻轉である。縁に因りて閨門に發動し、縁に因りて死す、此縁起に生死ありと雖も、肉は滅すのものにもあらざれば、生ずるものでもない。若し徹底滅するものなれば生ずる理由がない。又徹底生じたものなれば滅する理由がない。然るに生死あるは、生ずるにもあらず、滅するにもあらず、原因結果の順環を假りに生死と名けた迄である、肉は千古不滅である。千古の吾人の肉が、生るゝを始めとして祝し。死するを終りとして悲しむは、其縁起の始終に悲喜するものにして、生死に悲喜するのではな

い。其縁起は父母の閨門に發動するが故に閨門は千古の因果を廻轉せしむる、妙機妙用である。閨門に肉の善良なるもの不良なるものを感受し、發動することを自覺するは、實に大切なる問題である。國家を廓清するに、閨門を廓清するの大切なることは是れにて明瞭と信する。果して然れば、此日本魂禪を、毎朝夕に行ふて、身心堅固の閨門に感受する効果は、筆硯の盡す事を得ざる、大なる効果である。然のみならず、此身心堅固の日本魂禪を日々行ふときは、身心堅固の爲めに、常識が發達して、閨門の紊亂するが如き、行為を好まぬやうになる。猥りに妾を蓄へて漁色を爲すが如き、病的の行為は、知らず識らずの間になくなる。是れ蓄妾も、漁色も要するに身心不調の病的發作であるから、身心堅固のものに此發作のあるべき理由がない。此日本魂禪は國家を廓清するのみにあらず、家庭の圓滿にする大功徳がある。是れ余の實験に徴して、明かなる事實なることを斷言するのである。

第十章 結 論 (肉と壽命と安心)

大隈伯の百二十五歳説と此禪學

大隈伯は百二十五歳まで生きると断言して居らるゝとのことである。又世に人間の壽命は百歳と説きて、古人の五十年の常命、七十年の古稀を虚説だと笑ふ人も尠なくない。余が禪學療養を説く目的那邊にあるか。余は此療養の爲めに、壽命が長くなることも断言しなければ、百歳生きぬとも断言しない。斯の如きは、肉と壽命の關係を無視したる、推定である。因果を無視したる愚論である。

人は壽に生きず肉に生く

人は、壽に生きずして、肉に生きねばならぬ。壽は因果の命するところにして、如何ともすることを得ざる出来事である。假令百二十五歳生きると云ふも、死の命一度下らんか如何ともすることを得ぬ。百歳が人の常命と云ふも、五六十歳にて死ぬるものは澤山にある。假令如何なる療法、養生法を用ふるも、因果を回轉することは出来ぬ。生るときに得たる死の果は、學理も實際も、何物も及ぶべからざる、公明正大の法則で、是に向つて説を爲すが、根本の誤解である。壽は壽に任せて、八十歳生きるも可なり、三

八十年生きんより三十年の肉を受せよ

十年にして死するも可なり、百二十五歳も亦可ならん、其壽の長短を論ずるは、無意味である。壽に長短を論せんよりも、此肉に生るがよい。壽は自己に如何ともすることを得ざるものなれども、肉は自己の自由である。自己自由の肉を研究して、始めて壽命なるものを解し得るのである。

肉に生きるものは、壽の長短の如きは論外である。八十年生きんよりも、先づ此三十年の肉を愛せよ。百歳生きんと希望するよりも、一日の肉を活動すると云ふ希望がなければならぬ。壽長きもの、果して幸福か、短命なるもの果して不幸か。千古の肉の、不生不滅を以て論すれば、八十歳の壽、果して長きか、三十歳の壽、果して短きか。肉は壽の長短に活動するものにあらずして、肉の肉たるに始めて活動するのである。少しく例を求めん。

伊藤公爵は幸運兒

伊藤公爵の肉の一代を幸運兒の歴史なりと説くものがある。是等の人は吉田松陰の三十歳の短命を、不遇兒と論じて居る。果して然るか。何故に伊藤公爵は幸運兒にして、吉田松陰は不遇兒なるか。一面より見れば、伊藤公は不運兒にして、吉田松陰が幸運兒な

吉田松陰の壽は
三十歳なれども
是れ千古

るかも、知れない。位人臣を極むる経路には、如何なる悲惨と、如何なる權謀と、如何なる罪惡が潜むかも知れない。表面の勳功赫灼が、裏面の醜穢なる手段より來らすことも斷言は出來ぬ。位の光明の爲めに、表面の罪惡現れず、表面の勳功が裏面の罪惡を償ひ得るか否かは、英雄の心緒の亂らるゝところである。故に表面の位人臣を極むるを以て幸運兒なりとは斷言は出來ない。吉田松陰が年三十にして、斷頭場裡の露と化するも、彼れに私心なき限り、光風霽月にして、身心を國家に捧げ、尊王の大義に任せて、其公明正大の肉に生き、己れの目的の爲めに、斃れたるが故に、吉田松陰としては不幸なるも、歴史の千古の肉としては、實に幸福と言ねばならぬ。壽に不幸なるも、肉に幸福である。若し吉田松陰が節を曲げ、幕府の爪牙に利用せられて、温き褥に寝ね、金銀綾羅に身を纏て、名譽と勳功の捕虜となれば、彼は非常なる苦痛に相違ない。何故なれば彼の生れたるが勤王にあり、歴史にありしが故に、其目的に背反したる行動は、彼れの苦痛とせねばならぬ。苦痛に生きて名譽赫々たるよりも、目的に生きた斷頭場裡が、彼れの幸福である。即ち人は壽に生きずして、肉に生きねばならぬ。吉田松陰は壽に三十な

明日死するも、
生きる一日は健
全に安心せれば
ならぬ

れども、肉は三千年を一貫して、千古に生きたるが故に、非常なる幸福の人である。余は壽の長短に幸福を論するよりも、肉の長短に幸福を説くを適當と信するのである。以上の例に見れば、余の禪學療養を説くの目的は徒に壽命の長きを欲する爲めに説くにあらずして、肉の健全の爲めに説くのである。八十歳を得んと欲するは、八十歳の爲めに生きるにあらず。自己の爲めに生きるにあらず、此千古の肉に生きて始めて無病長生なる真個の目的に到達するのである。唯八十歳とか、百二十五歳を生きたと云ふも、其生きる理由が明かならぬのである。壽と肉の關係が密接して、壽に生きるもの肉に生き始めて禪學療養の目的は達し得らるゝのである。生るゝと云ふ事が、自他の超越したる出來ごとなる以上は、死すると云ふ事も、亦自他を超越したる出來ごとである。故に、生死ともに、生死に任せると云ふことが、眞理である。人は壽命は壽命に任せ、明日死するも、生きる一日は健全なる上に安心しなればならぬ、養生せねばならぬ。此健全なる爲めに禪學療養を説くものにして、長壽の爲めに説くのではない。長壽が健全の結果なりと言はゞ、長壽を論せざるも健全を論すれ

ば、自ら長壽になる。故に百二十五歳生きるとか百歳生きると云ふは、肉の爲めに壽命を説かず、壽命の爲めに肉を説くものにして、余の説とは根本を異にするのである。余は不生不滅に一貫したる肉を、日本人は日本人と云へる、歴史の上に生命を存するものにして、従つて百歳の壽も、百二十五歳の壽も、此歴史の出來事なるが故に、壽命を歴史に任せて、長短を論ずることの至當なるを信するのである。死の安心も又斯の如くである。

從來佛敎の説く安心は、他士の往生である、極樂である。即身成佛を説く眞言宗も、娑婆即寂光淨土を説く禪宗も、此安心なるものは、國家にあらすして宗教である。其敎に安心せよと説くも、國家に安心せよとは説かない。基督教の安心は、神の救ひである。佛敎の安心は、佛の救ひである。宗教は何れより説くも、此生死廻轉の肉を、或る偉大なるものに救はるゝと説くのである。余は此安心に、安心なることを得ぬ。

余は宗教に安心するよりも、國家に安心せよと説くのである。又此肉に安心せよと説くのである。吾等の肉は生が始めにして、死が終局なれば、吾等は他士に往生を願ふも可

なれども、吾等が今生れたるは、因なきに生れたるにあらすして、原因に依りて生れたのである。其原因なる物は、何物なるかと云ふに、吾等の國土である、國家である、先人である、先人の肉が吾等の肉の原因である。先人の行爲が、吾等の行爲を生ずる原因である。吾等は此先人の行爲を縁せずして生るゝことを得ず、先人の肉なくして生るゝことを得ぬ。吾等日本人のあるは三千年の歴史あるが爲めである。吾等は歴史を離れて、吾等の生すべき原因がないのである。其生るゝや、日本人は日本人の歴史に生れたる以上、日本人の死するや歴史に死なねばならぬ。生死ともに一日も歴史を離るゝことを得ぬ、國家を離るゝことを得ぬ。然るに歴史に安心せず、國家に安心せずして、他士の安心を説く、果して安心し得るか。

余は生るゝに、歴史に生れたると自覺したる以上、死するも歴史に死するが故に、死に一點の疑問もなければ、一點の恐怖もない。吾の肉は三千年の間に生死往來して、今亦生死の往來なるが故に、生に一點も疑ない。疑なきが故に、死に一點も疑はない。死は壽命の盡きたる時にして、死して後ち何れに行くぞと、言へば。生るゝが歴史に生れた

極樂に往生せよ
は國家を無視
したる説ではな

る限り、死も歴史に死するが故に、死するや日本人である。生の日本人たるに、死の日本人たらざる理由がない。余は千古の日本人として、此生死あるに安心するのである。斯の如く説くときは、佛教に説く西方淨土に、往生すると云ふ、眞宗の安心の如きは、根本に於て余の安心と異なるが如き感想を生ずるのである。一は國家の安心にして一は淨土の安心である。一は因果の廻轉にして、一は往生極樂である。余の説く安心は肉にして、眞宗の説く安心は唯往生である。斯の如く天地懸隔の相違あるが如くなれども、是れ語に同じからずして、實に同じきことになる。

極樂に往生せよとは、國家を無視したる説ではない。又國家の外に極樂なる者の、實在を説くのではない、唯極樂に往生せよと説くのである。極樂と云ふ二字に、凡夫の自我を奪ふたるものにて、畢竟は極樂と云ふ、文字は主にあらず、凡夫の自他の二見を起さしめざるが主である。其の自他の二見を捨てよとか、妄想を離れよとか、説を爲すときは、雜念に雜念を加へて、自他の上に更に自他を論ずるが如き奇怪の安心となるが故に、其雜念を奪ひ盡して、念佛と爲し、其念佛其儘が極樂往生と説くので、畢竟する

に、極樂に往生せよとは、自我を奪ふ釣針に外ならぬのである。極樂に往生するよりも、唯念佛を申すと云ふ事が、主にならねばならぬ。

此自他の二念を奪ひ、念佛三昧となりし時、個人は彌陀に攝取せらるるが故に、個人なるもの、實在は、否認せられて、不生不滅の緣起となる。緣起に自覺すれば、三千年否な、千古の緣起なるが故に生死あり、世界あれども、其の世界も生死も一緣起となる、是れ無量壽である。是れが極樂である。極樂は西方にも東方にも、世界至るところにある。日本人の極樂は日本國である。親鸞上人の、西方淨土は、日本の千古不變を、假りに西方と名附けたものである。故に西方、此を去ること遠からずとか、娑婆即寂光淨土と説く、國家を西方淨土と説くは、有爲の國家を説かずして、無爲の清淨無垢を説くが故に、極樂淨土と名附たものである。要するに此慾望の人間界を、直ちに清淨無垢の淨土なるぞと、證明したのである。吾等は慾望の日本、修羅の清國と思へるを、佛は淨土なりと證明せられたのである。佛の目的は此人間を清淨無垢に因果を廻轉せしめんが故に、淨土と説き給ふのである。國家に安心せよと説くは、却て迷を深からしむる

が故に、迷ひなき、思量の及ばざる浄土を建立したので實に國家を清淨に爲し、人間を清淨にせん爲めの、佛の大慈悲に外ならぬのである。余は是を直覺に、國家を拈じたるものにして、説くところ異なれども、其目的は一なるが故に、此千古の國家に安心すべく説くのである。

佛は何故に國家に安心せよと説かずして、浄土に安心せよと説きたるか。國家は各國政體を異にするものにて、一國殊に異なるものである。佛の教は各國平等にして、一慈悲である。獨り國家のみを説くにあらずして、草木禽獸蟲魚一切を濟度するが佛の目的である。慈悲である。故に佛の浄土と言へるは、此一切の、森羅萬象何物をも成佛せしむる爲めに、説きたるものにて、浄土の二字は、何物の往生をも包含する世界通有である。換言せば英國人にも浄土に往生せよと説く、日本人にも浄土に往生せよと説く。佛の此浄土に往生せよと云ふは、其國家に往生せよと云ふ義にして、英國人も、日本人も、集合する一の浄土なる實有のもの有つて、其處に往生せよと云ふのではない。然るに浄土に往生せよと云ふは、眞理同一なるが故に、一の實有なる浄土なるものを存在するが如

此國家が佛の浄土なるに於て始めて佛の慈悲を解する

く説きたるも、實を言へば、國家を離れて日本人の浄土なるものはないのである。

佛は宇宙何物も、浄土に往生せしめんと説き給ふは、其事々物々の、眞理に任せしめんと慈悲にして英國人は英國人として英國に安心し、日本人は日本人として日本國に安心せしめ、禽獸は禽獸にして、各々の面目に往して、安心立命せしむるが、佛の慈悲である。佛の浄土は洋の東西なく時の古今なれども、佛の浄土に往生するものは、各國異ならねばならぬ。其國家が浄土なるに於て、始めて佛の慈悲を解するのである。余が國家に安心すると云ふは、佛の浄土を、差別の上に解したるものにして、佛が西方浄土に、安心せよと仰せらるるを、私は西方に安心しましたと云ふが、國家に安心したと云ふ事になるのである。故に、親鸞上人の西方極樂浄土に安心せよと仰せらるるも、余が國家に安心すると云ふも、結論は同一である。要するに、此肉を千古の歴史に自覺するが、往生極樂の本懐を解けたのである。斯の如く、國家に安心して、死に恐怖ありや、大死一番し來れば、大生一番し來ると同一にして、生も死も日本人なれば、此死は終局にあらずして、唯緣起の往來である。此

肉の往來に大悟せば、余が禪學療養の本面目を解するの人と云ふべきである。

二〇八

禪學療養終

大正十四年二月一日印刷
大正十四年十二月五日發行

定價金八拾錢



禪學療法

著者

田中菊次郎

編輯者兼
發行者

大阪市南區松屋町四番地
宗像石萍

印刷者

大阪市南區松屋町四番地
鳴田良治

印刷所

大阪市南區松屋町四番地
法令館印刷工場

發行所

大阪市南區松屋町三九番地
神靈館

發賣所

大阪市南區松屋町末吉橋北へ入
榎本法令館
振替大阪三四八二番 電話東一六二四番
一七九五番
東京市神田區佐久間町一丁目三番地
榎本法令館東京支店
振替東京七二七九三番 電話淺草四七一七番

終

